

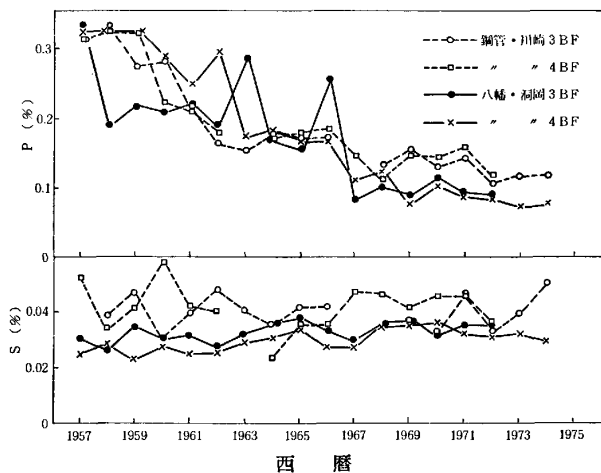
## コ ラ ム

## 溶銑中のりん，硫黄の変遷

LD転炉導入後の銑鉄中のP，Sの時代による推移を示す。Sはほとんど変化していないが，Pは時代と共に減少している。Pの減少は，低りん鉱石の買い付けと平炉滓の高炉への装入中止によるものである。

(鉄鋼科学技術史委員会製鋼ワーキンググループ編：「我国における酸素製鋼法の歴史」(日本鉄鋼協会，1982年1月) p. 358)

(千葉工業大学 雀部 実)



溶銑成分の推移 (各年の代表値として4月の値を利用した)

## 編集後記

▶溶銑処理特集号をお届けします。

溶銑の脱りんは開発途上の技術であり，特集号を編集することは時機尚早であるという意見もあつたが，依頼原稿を含め32件に及ぶ多数の論文(技術報告・解説等)が投稿され，溶銑処理技術の現状を把握するのに十分な特集号が編集できたのではないかと思います。投稿者始め関係者に感謝します。

▶低成長時代になり，製鉄技術は鉄鋼材料を高級化するための技術と製造コストを低下するための技術に分極化される傾向にあります。それに対応する技術の一つとして溶銑処理が注目されています。しかし，本特集号から判断すると，溶銑処理をベースとした新製鋼法はまだ完成していません。優先脱珪，優先脱りんを定量化する新しい理論の展開と製造現場での開発努力を期待します。

▶今回の特集号では，開発途上の技術であるためか，論文より新技術の内容を紹介した「技術報告」の比重がやや高くなりました。このうちいくつかは，論文と

して投稿されたものを，「記録を残すことが重要である」との考え方を投稿者に理解していただき，技術報告として掲載したものです。技術報告のページ数が論文に比して少ないことや技術報告という名称が不適切であることなどのため，技術報告が論文と同一レベルであるという理解が一般的でなく，投稿者や関係者に迷惑をかけた。和文会誌分科会で論文の種類に関する基本的な見直し作業が始まったことを申し上げ，お詫びとします。

▶溶銑処理に関係ある過去5年間の論文名を余白を利用してつけ加えました。溶銑処理法の研究や開発に利用していただければ幸いです。

▶本特集号が配布される頃には，秋の講演大会も終わり，溶銑の脱珪や脱りんについて活気ある討論が行われているとともに新しい知見が得られていることと思います。近いうちに溶銑処理特集号その2が編集されることを期待します。(H.K.)